



BECHSTEIN KLAVIERSCHULE

ピアノ教育の現場から——

ベヒシュタインピアノの特性を活かしながら、音楽をより深く理解するピアノ教育を実践している内藤晃先生と石本育子先生のお二人による「ベヒシュタイン シューレ誌上特別レッスン」。第3回目の今回は「ひとりでアンサンブル」をテーマにお届けします。

内藤晃先生のレッスンが開講されました

2020年12月4日(金)に汐留ベヒシュタイン・サロンにて内藤晃先生によるベヒシュタイン シューレのリアルレッスンを開講されました。

当日ご受講いただいた方からコメントをいただきましたのでご紹介します。

受講者の声

数十年ぶりのブランクを経て自己練習を再開しましたが、理想の音色に近づけない状況に限界を感じ、勇気を出してレッスンを申し込みました。

一通り弾き終わると、自身でもうっすら認識していた問題点をすぐに指摘していただき、全体の構成を理解した上でバランスをコントロールする方法や手指の構え方、和声の一音一音に神経を行き渡らせつつ、脳内では常に次の音を意識する必要がある等、多くの示唆に富んだポイントを大変わかりやすく伝えてくださり、その後の練習の仕方が様変わりしました。(Y様)

第2回のレッスン開催も現在検討中です。開催時期など詳細が決まり次第本紙およびベヒシュタイン・ジャパンのホームページにてお知らせいたします。
<https://www.bechstein.co.jp>



「一人何役も弾く」ということ



内藤 晃
(ピアニスト)



石本 育子
(たかまつ楽器ピアノ講師)



加藤 正人
(ベヒシュタイン・ジャパン代表)

石本: 内藤先生とよく話していることに「普遍的なものを伝えたい」という共通した想いがあるのですが、「普遍的なもの」というのはそんなに多いわけではないと思っています。

その中の1つにピアノの楽譜の読み解きがあります。

内藤: 88の鍵盤で広い音域をカバーするピアノでは、メロディー、内声、ベースラインと一人何役も演じることになります。このすべてのパートに血を通わせていいアンサンブルにするのが至難ですね。どうしてもメロディー以外の要素が「メロディーの付属物」みたいになってしまいがちです。

石本: そうですね、ですのでまだ小さくてさほど複雑ではない曲のうちから、構造を理解して弾く脳を育てるのがよいと思っています。

例えばブルグミュラーで言えば25番もいいのですがもう少し声部が見えてくる18番が適していると考えています。

内藤: 個々の声部がどんなパート譜になるか、分解して感じてみることによって、声部の抑揚とアンサンブルが自然になりますよね。パート譜のメロディラインが違うのだから、当然声部が違えば異なったカーブを描いていくわけで、これが「一人何役も弾く」基礎だと思っています。

石本: 例えば第9曲の「朝の鐘」ではABAの3部形式のAでは上声部は常にE♭で鐘の音だったものが、Bでは2声のアンサンブルになる。複雑な絡み合いはないのですが、ここでは各声部の抑揚があり、Aより脳を使います。バスの動きと和声を感じながらそれをしていくので、子供たちにとっては楽ではなくなりますが、面白いと思ってもらいたいですね。



内藤 晃
(ないとう あきら)

ピアニスト、指揮者、作編曲家。東京外国語大学ドイツ語専攻卒業。在学中よりピアニストとして演奏活動を始め、桐朋学園大学指揮教室、ヤルヴィ・アカデミー(エストニア)などで指揮の研鑽も積む。弾き振りを含む多彩な演奏活動とともに、「もっと深い音楽体験」を共有すべく、ユニークな発想でレクチャーや執筆を行う。月刊音楽現代に「名曲の向こう側」を連載、訳書にA.ゲレリヒ著「師としてのリスト」(近刊、音楽之友社)、校訂楽譜に「ジョン・アイアランド ピアノ曲集」「13人の女性によるピアノ小品集」(カワイ出版)などがあるほか、音楽雑誌やCDライナーノートの執筆も多い。札幌シンフォニエッタ、アピアント交響楽団、杉並グース合奏団などを指揮。2014年、全日本ピアノ指導者協会から新人指導者賞受賞。一次資料から作曲家の美意識を読み解く独自のレッスンを各地で好評を得ている。CDに「Primavera」(レコード芸術特選盤)「言葉のない歌曲」(同準特選盤)などがあるほか、マリナ・吉川雅夫氏や作曲家春畑セロリ氏のCDでピアノを務め、一流ソリストや作曲家からも厚い信頼を寄せられている。主宰ユニット「おんがくしつりオ」では教育楽器によるエキサイティングなアレンジが人気を博し、全国各地に招かれている。
www.akira-naito.com



石本 育子
(いしもと いくこ)

静岡県浜松市出身。信愛学園高等学校音楽科を経て武蔵野音楽大学音楽学部声楽学科卒業。古屋豊、川内澄江の各氏に師事。東京・浜松・香川において数多くのコンサートに出演するだけでなく、自主企画の演奏会を立案運営。独自の指導法による連続講座をピアニスト内藤晃氏と共に汐留ベヒシュタインサロンにて開催。たかまつ楽器青い鳥音楽教室主事。青い鳥マスタークラス主任講師。四国二期会会員。全日本ジュニアクラシック音楽コンクール及び東京国際ピアノコンクール審査員。



加藤 正人
(かとう まさと)

ドイツ・ピアノ製作マイスター称号を取得
現在ベヒシュタイン・ジャパン代表取締役社長

A 通常のバス・和声・メロディの上に、鐘の音がバランスよく聴こえるように



B 左手でバスと和声、右手でデュエットの2パートを



内藤:ところで、ベヒシュタインの澄んだ響きで弾くと、各声部の横方向の動きもくっきりと聴こえますから、血が通い切っていない声部が浮き彫りになって、アンサンブルの精度を高めていくのにうってつけですね!

加藤:ベヒシュタインの設計・製作思想の一つにく人の声のように抑揚をつけられる音造りができるピアノ>という考えがあります。同じ言葉からも人の声は、抑揚の変化で喜怒哀楽を感じることができますね。ある声部に異なった抑揚をつけることによって、和音の泉の中から感情を強調した声部として浮き立つわけです。音量だけのアプローチとは異なる効果です。ベヒシュタインの独特な倍音構成は、*p*(ピアノ)から*mp*(メゾピアノ)でも色彩の変化をつけやすくしています。この概念は100年前から現代に引き継がれる重要な要素の一つです。

石本:逆に、音符を1つ1つの記号としてパソコン入力するように打鍵していることも、また音符を縦に和音として読んでいることも、バテてしまいますね。ベヒシュタインで弾いていると舌が応でも繊細な耳が育っていきますね。

内藤:楽譜を、パート譜の集積したスコアとして、ミルフィーユのように感じられるといいです。そのためには、ピアノ曲として書かれていても、作曲家の脳内でどのような編成・スタイルが想定されていたか、鍵盤上にアウトプットされる前のサウンドを思い描けるといいですね。10本の指で広範囲の音域をカバーするピアノは、歌や室内楽、オーケストラまで、あらゆるスタイルの音楽を翻訳可能な、万能楽器なわけです。

内藤先生、石本先生がお感じになっているベヒシュタインピアノの特性を活かしながら、
実際どのように生徒さんたちに音楽を理解させていらっしゃるのか、
誌上レッスンと動画をリンクして公開いたします。